
魔法少女リリカルなのは Only the Spartan

シックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Only the Spartan

【Nコード】

N1662BA

【作者名】

シックス

【あらすじ】

突如ある魔法世界に現れた最終兵器『HALO』そしてその鍵として生み出された青年。そして、幾年ものとき経て地球に降り立った彼は何を刻み、何を残すのか・・・これはそんな物語。

注：この作品はほぼ100%作者の自己満足で構成されています。最強、チートが苦手、原作を見直してこい！って人は閲覧はご遠慮下さい。

ブローグ 戦士（スパルタン）の目覚め

とある施設・・・

ゴポポポポ・・・

そこにはアーマーに包まれた一人の青年が液体に満たされたポッドに入れられていた。

ビービービービー

突然カプセルが警告音を発し始める。

コールドスリープ解除

ゴポポポ・・・プシューー

慌ただしい音を立ててカプセルが開きまだ戻りきっていないかった液体をぶちまけて彼を解き放った。

「ここは・・・俺は一体。頭が痛い・・・」

『目覚めましたか？マスター。』

「声・・・一体どこから。」

彼は周りを見渡すがどこにも人影はなかった。あるのは何かの資料と研究機材だけ。それもほとんどが風化してしまっていた。

『ここです。テーブルの上のリングが私です。』

「これか？なぜ物がしゃべるんだ？」

『・・・やはり、一部知識が欠落していますね。（奴ら、時が来たからって無理やり目を覚まさせることなんてないだろうに。）』

「知識？欠落？一体どういうことだ？説明してくれ。」

『では、軽く説明させていただきます。あなたは、長期間に渡ってコールドスリープ状態になっていたんです。その間睡眠学習をコンピューターに行わせていたのですが・・・少し横やりが入ってしまった記憶などが不安定なまま目が覚めてしまったというわけです。』

「そうなのか、だがそもそも俺はなんで眠っていたんだ？」

『・・・それは、その日記を見ればわかると思います。』

俺はすぐ傍においてあった古ぼけた日記を手に取り開ける。少しかすれてしまっているがなんとか読めそうだ。

○月○日

今日、突如この世界に現れた星と謎のリングらしき残骸を調べに行くこととなった。一体あれはなんなのだろう。不思議と嫌な予感がした。

内部で発見したデータによるとこの建造物、リングは何かの兵器だったらしい。まだ解析がそこまで住んで無いためなんとも言えないが……

○月 日

我々はなんというものを見つけ出してしまったんだろう……これは、ある生物が寄生できるすべての知的生命体を抹殺するという平気だということが判明した。万が一これがあの管理局の手に渡ったらとんでもないことになるだろう。

その後、惑星の探索をした。だがこの星にはほとんど生命反応が見当たらなかった。だが、人が着けていたであろうアーマーの頭部を見つけた。なぜ頭部だけなのかはわからなかったが、この辺では見たことのない材質だったので検査することにした。

○月 日

あのアーマーについて分かったのは相当の強度を持っているということとだけだった。それよりも内面に付着していた細胞のほうに興味深いものだった。人間のものではあるのだが何か違った、普通の人の細胞よりもはるかに優れた細胞だったとしか言えない。他にも異質な細胞も見つけた。ならばと、この細胞を使いクローン人間を作ることにした。人造人間とも言えるが。急がなければ……我々には時間がないのだから。

月×日

ようやく、完成した。完全に細胞と同調した者が生み出された。他の実験体たちは、異質な細胞の方に吸収されて化け物と化してしま

った。そして、奴らは私たちに寄生して数を増やしてきた。もう研究員は私を含め数名となってしまうた。だが、これでようやく報われる。

月 日

どうやら管理局がここに気づいたらしいこちらへ向かってきている。だが、この化けもの共を他世界へいかせるわけにはいかない。私は、この星ごと虚数空間へ沈めることにした。あそこは未開の地、魔法の通じない空間。私も、もう長くはない。すまない・・・まだその目を開けぬ我々の希望よ。もしも、生き伸びているのならあれを・・・
・HALO^{ハイロー}を 守り抜いてくれ。決して管理kよくniは

ここまでで文字が消えていた。

寂れた施設の窓から見える空に浮かぶ巨大なリングを見据える。

「そうか・・・そういうことか。俺は・・・」

プロローグ2（前書き）

ぶっちゃけしょうもないです。

ブローグ2

こんなもんか・・・しかしすごい数だな。これは。」

『私としてはこれだけのロストログアを管理局から盗んできたことの方が驚きですがね。』

「でもよ、ステルス使ったら誰も気づかないんだぞ？まったく、管理局のセキュリティっていうのも脆いな。」

一応我も手伝ったんだが

「お前は俺の一部だろうが。自分を褒めてどうする。」

劳いの言葉くらいないのか。

「ない。」

お前・・・

『いつまで遊んでんですか、さっさと帰りますよ。』

「イエッサー」

お疲れくらい言っただっていいだろうに・・・

日記を読んだあと、とりあえずリング（ハロというらしい）から魔法やらなんちゃら説明を受け、とりあえずあの空中に浮かぶ巨大殲滅兵器HALOを使って、日記の奴らを絶滅させようと思っていざ行動に出ようとしたのだが・・・

「なんだこの状況・・・」

施設の外には大地を埋め尽くすほどのフラッド（日記の『奴ら』のこと）がいて、その奥に巨大な物体が蠢きながら鎮座していた。でそのフラッドの大群がどういうわけか俺に向かってひれ伏してるんだけども一体何だこれは。誰か説明プリーズミ―！

ならば答えよう

「誰！？」

「我か？我の名はグレイブマインド。すべてを喰らうもの、だつたといふべきか。」

「でそのグレイブマインドがなんのようっ？」

・ いや、主が説明を求めていたから説明しようとしたんだが・

ああ、そういえば。っていうか主？

それを含めて説明しよう。主、あなたは強化人間と我々の細胞によって生み出された人間、そしてHALOの鍵。我々がひれ伏しているのはあなたが我よりも高位の存在だからだ。本来なら我よりも上はいないはずなのだがな。我は最終形態故にな。

「よくわからんがとにかく分かった。つまり、俺はお前たちの上位種で、あのHALOの鍵だと。」

・・・まあそういうことだ。（大丈夫だろうか）

それにしても俺はとんでもないものとして作られたな。作られたからにはもうどうしようもないが俺が作られた理由は日記のことを考えると。

「『フラッドの抹殺、そしてHALOを管理局から守ること。』」

『まあ、フラッドをどうするかはマスターに任せます。あとは管理局ですが、まあこれもさほど問題はないかと。』

「なんでさ。」

『そもそも、この地では魔法は通じませんからね。それにここに来るまでに通る虚数空間は一切の魔法を封じる場所ですから普通は魔導士は近寄ろうともしません。だから、ここへ来るとしたらそれは馬鹿か命知らずくらいですよ。』

「ちなみにここから虚数空間までどのくらい距離があるんだ？」

『だいたい100km位ですね。』

随分と距離があるな。そもそも、俺はどうやってこの場所から出ればいいんだろう？

それならば方法はある。

「ほんとか！」

『はい、HALOやこの星には我々の知らないようなオーバーテックノロジィが山ほど眠っていましたからね。機械による時空間移動で問題は解決します。』

おおー

「で、その機械はどこにあるんだ？」

それは、主の身に付けているそのアーマーに備わっている。他にもなにやら着けてあった気がするが・・・

『それなら説明書がありますよ。』

「あるんだ・・・どこ？」

『今見せます。』

すると、ハ口から光が出てきて、何かの図面が現れた。これがその

説明書らしい。

「えーっと・・・付加機能1、アンタキフィールドAMF

2、バブルシールド

（この二つはどちらか片方しか発動でき

ない。）

3、魔力増幅装置

4、格納空間

5、超高性能ステルス

6、次元転移 以上」

なんだこのスーツおつそろしいほどに高性能だ。というか、人間に使いこなせるものなのかこれ？（そもそも人間の時点でこのスーツで行動するのは重量的に不可能。）

「まあいいか。とりあえずこの後の方針だけでもHALOが見つかる危険性がほぼゼロなら管理局に偵察に行こうと思う。あわよくば何か盗んでくればいいし。」

使える武器とかがあつたら奪えたらもうけもんだな。

『それはいいんですが大体マスター管理局の場所しってるんですか？』

「あ・・・」

『・・・・・・』

・・・・・・

「『

・・・・・・・・・・・・・・・・

』」

「なんとかなるさ！」

『　　こんなマスター（主）で大丈夫か？

』

で今に至るが、まさかいきなり当たりを引くとは思わなかったぜ。
しかも、偵察は大成。ロストログアとか言うアイテムを使えそう
なものを奪ってきた。まだ山のようにあったし気づかれないう。
ただなあ、結構な数あったと思うんだが未だに格納空間がガラガラ
なんだよなあ・・・・・・いったいどれだけひろいんだよこれ。

『マスター、向こうが異変に気づいたようです。』

たしかに建物の中が騒がしくなってるな。見つかる前にさっさと
んずらさせてもらうか。

ちよっとくらい褒めてくれたって・・・・

「まだすねてるよこいつ・・・・」

おれは呆れつつも、アーマーの腕につけられている機械に位置情報
を打ち込む。

『転送開始』

そして物語は原作ちよつと前へ・
・
・

プロローグ2（後書き）

主人公「原作ちよつと前って大体いまはいつぐらいなんだ？」

作者「4年前」

主「そんなに飛ばすのか!？」

作者「だって無理に間の話をうだうだ言うよりはいいだろ？おれには文才がないんだから。」

主「おいおい、ていうか俺の名前は？さっきから主人公って表記されてんだけど。」

作者「ああ、次の時に紹介するから安心しろ。」

主（大丈夫だろうなこの駄作者・・・）

主人公設定

名前 シックス

年齢 10歳 原作開始時14歳

魔力ランク 通常 A ミヨルニルアーマー装着時 SS アーマー＋リミッター完全開放 EX

アルハザードで作られたスパルタン？と呼ばれる強化人間。とあるスパルタンの細胞をベースに寄生生物フラッドの細胞を組み込んだ強靱な肉体を持ち、魔法なしならば間違いなく最強。

管理局員に襲いかかっているところが度々確認され、魔法を使わずに魔導士を一蹴したり魔法が一切通じず、対抗することができないことで『管理局の悪夢』と呼ばれている。本人は中二くさいと否定。魔力色はルージュ、中性的な顔で少し女性に間違われることもあるが男。髪はギリギリ肩にかかるくらいの黒髪で眼は緋色。楽天的な性格で普通の人間を羨ましがっている。

術式 アルハザード式。

好きなこと・もの 武器開発、改造 TVゲーム あまい物
嫌いなこと・もの 管理局 転生者と言いつける屑野郎

ミヨルニルアーマー Mk.？

主人公のバリアジャケットであり、ストレージデバイス

ゲーム『HALO』の主人公マスターチーフが常に装備している強化戦闘服

動力源として小型の核融合炉を内蔵しており、スーツを着あたり小

型宇宙艇一隻と同等のコストと言われる。

ある程度の攻撃に耐えるエナジーシールドや複合装甲、使用している武器に応じた照準や残り弾数などの情報が表示されるHUD、周囲の動体を検知するモーショントラッカー、さらに致命傷以外ならば即座に応急処置を施せる生命維持機能、真空・無重力空間での活動能力など、驚くべき高性能を等身大に内包している。

パワードスーツとしての肉体強化機能もあり圧倒的に人間離れた戦闘能力を発揮できる。

また、HALO3冒頭でマスターチーフはこのスーツを着けたまま高度2kmから墜落したが、生存している。

あまりにも強力なパワーと反応速度を持つため、スパルタン以外の人間にはスーツを制御できない。ちなみに装備時の重量は本人の体重も含めて400〜500キロにもなる。並の人間は体当たりだけでも軽く吹っ飛ばされてしまう。

今作ではAMF、バブルシールド、魔力増幅装置、次元転移、格納空間が付加されている。

バブルシールド 物理対策

起動後自身を中心に一定の範囲にシャボン玉のような空間を作り出し、その中は外部からの攻撃を遮断するようになっている。

デバイス ハロ

自律型インテリジェントデバイス

待機時は銀色の腕輪。自律時（人間化）の時の容姿 髪は腰まであるダークブルーで眼は蒼色。

性格は冷静沈着で世話焼き。

数種の形態を持っており、所持者の記憶にある道具や兵器を再現す

ることができる。

1thフォーム バランス ニ丁アサルトライフル

2thフォーム パワー重視 対戦車ライフル or 対装甲ガトリン
グ砲 or ロケットランチャー

3thフォーム 接近戦 エナジーブレード or グラビティーハン
マー

4thフォーム スパルタンレーザーGXグレード（対空間レーザー砲）

スパルタンレーザーGXグレード

元は対戦車レーザー銃。が、シックスの改造により対空間レーザー
砲まで強化され最大出力はアルカンシエルに匹敵する。

打つまでに30秒ほど充填時間が必要な上その間シールドが消えて
しまい隙だらけになってしまう。

スパルタン？の簡単な説明

非人道的に徴兵し、複数の肉体改造を施した、超兵士。優れた身体
能力とミョルニル・アーマー/最先端機甲技術（advanced
mechanical technology）とを融合させた
最初のシリーズ

フラッド

胞子状の寄生生物。パラサイト 起源は不明であるが、15万年以上前に銀河系

に出現した。際限なく増殖を繰り返し、あらゆる知的生命体を飲み込もうとしている。寄生された生物は無残な姿に変化し、生前以上の体力、筋力で非感染者に襲い掛かる。知的生命体に寄生した際はその記憶情報を利用できるため、銃器や乗り物も使いこなす恐れベキ存在である。また犠牲者にも自意識と若干の体のコントロールが残ることがある。フラッドの歴史は人類よりもはるかに長く、古の時代から脅威とされてきた。

フラッドは大きく分けて3つに分類され、蛸のような「素体」、人間などの適切な宿主に取り付いたときに心臓から全身を支配する「寄生体」、素体を体内に五〇六匹有する「キャリア」であり、それらの頂点に立つのがグレイヴマインドである。

寄生体は非常に打たれ強く、腕部などはおろか、頭部すら欠損しても攻撃を続けることができる。しかし、元々肉体が痛んでいるためか、物理的攻撃に対しては脆い。ある程度形をとどめていれば、一度倒されても素体を取り付くことで復活する。

HALO

フラッドの研究及び保存を目的としてフォアランナーにより建造された七つの巨大な環状建造物。また、フラッドの拡散を防止するために、フラッドの宿主となりうる全ての知的生命体を絶滅させる最終兵器でもある。詳しい構造は分かっていないが、3ヶ所にある「パルスジェネレーター」からパルスを照射し、知的生命体を全滅させる。1基のHALOの有効範囲は約25000光年で、全てのHALOを同時に起動することで銀河系の直径の3倍の範囲に効果を及ぼすことが可能。

主人公設定（後書き）

一応HALOを知らない人にもわかるように細かく記載しましたが
多すぎて逆にわかりにくいかも。

あれから数年・・・俺はロストロギアを集めつつ、管理局の邪魔を
ちまちま仕掛けていたんだが、どうやら重要な任務の妨害もしてい
たようでいつのまにやらS級犯罪者になってました うんまあ、
そんなわけで俺は一時的に管理外世界に逃げることにしたんだ。

そして、今俺は

「ZZZZZZ...」

「護くん起きるなよ。もうお昼休みだよ？」

「んあ？もうそんな時間か。」

小学...校というものに行っている。

事の発端はこの地球にきて一年程経った時のことだ。

「もうここにきて一年か。早いな。」

「そうですねー。」

ピチューン！

「あ、また負けた・・・」

「ハロ、俺に勝とうなど二百年早いわ。」

主も大人げ無いな

「ゲームに大人げないも糞もあるか。そういえばあの子は元気かねえ？」

「あの子？ああ、そういえば以前この世界に来たときに泣いてたあの子ですか。」

たしか、なのはだっけか？一回あっただけなのになぜか、危なっかしい子だと感じるのはなぜだろう。それに、アイツがなあ・・・。

『俺のなのはにちかずくんじゃねえ！』

転生者にはろくな奴らがいないからなあ。絶対何かやらかすぞあいつ。

「なんせ以前襲撃されたときも突然ですもんね。」

「だな、勝手に悪だのハーレムだのモブだの・・・ああ、思い出したら腹立ってきたあ！！！！」

あ、主。落ち着け。また家の壁を壊す気か！？

「修理代だつてバカにならないんですから落ち着いてください!」

「フーフー、よしもう大丈夫だ。でだ、今更なんだが小学校って何?」

「は?」

「いやだつてそんなこと全然知らないんだもん。」

で、変身魔法で身長を縮めて私立聖祥大学付属小学校に入学した。なぜ小学校かつて?おれはね、戦闘に関する知識や技術は頭に詰まつてるけど、一般教養に関するものは一切頭にないのさ。ハッハッハ・・・うん、要は睡眠学習にインプットされていたのは戦闘関係だけだったということだ。

それにね、おれ2m身長あるけどまだ12だからね?

「・・・zzzz」

「ってまた寝てる!?」

「ちよつとなのは、遅いつてまだ寝てんのこいつ?」

「さっき起こしたのにまた寝たんだよ。」

「あはは、相変わらずだね。護くん。」

「zzz・・・はっ!？」

「「あ、起きた」「」

「いやあ、わるいな。」

俺は自作の弁当をほおばりながら謝罪を入れる。

「次からはもうちょっと早く起きなさいよ。」

「へいへい・・・ってまた俺を誘うこと前提かよ。バーニング」

「誰が、バーニングですって？バニングスって何回言わせんのよ!」

ゴスッ

「いてえ・・・」

「自業自得だと思うよ?。」

たしかにすずかの言うとおりかもしれないけど。

「何も殴らなくってもいいだろ。そのうち俺の脳内でシナプスが絶滅するわ！」

まあ、実際は痛くないけど親しいからって拳骨はないだろ。拳骨は・

そして、俺はあることに気づく。

「おいなのは、アイツは？」

「え？ああ、ライル君？今日はダメって言うてるのに無理やり付いてこようとしてきたからしつこい人は嫌いって言ったの。そしたら「照れなくてもいいのに」って頭撫でようとしたからそのまま逃げてきたの・・・。」

「なのは、大丈夫だったのか？」

「なんとか・・・。」

なのははうんざりしたと言いたいかのように顔を苦笑に染める。

「ライル君って私たちと周りとで全然対応が違うよね。」

「そうそう、私たちの時は優しくせに男子だとすごく邪険にするのよね。ほんとに気に食わないわ。」

転生者は簡単に言う和不快な奴だった。女子には優しく男子に対してはがんを飛ばすほどだ。あのへんの豹変を見ていると気分が悪くなる。しかも、あまりのしつこさに彼女らには嫌われる始末。それも本人はそれに気づかず自分に惚れ込んでいると勘違い。最悪だ。

この前もあいつを殺して解して並べて揃えて晒してやるのかと思っ
たんだがさすがに学校で殺傷ざたはまずいのだと思ひ決行は中止
した。（割りと本気だった。）

ついですが、あれだけルックスがいいんなら中身もよかつたらなの
はたちに嫌われることもなかっただろうに・・・マジウケルwww。
まあ、俺はクズな転生者に優しくするつもりなど毛頭ない。いい奴
だつたらここまでひどい対応はしないが。

「まあ、なんだ・・・相談だけでも聞いてやるから何かあつたら俺
のどこに来いよ。」

「ありがと・・・」

なんとかしてあいつを抹殺できないだろうか？

そんな物騒なことを考えながら弁当を咀嚼する俺だった。

「・・・ちっ！」

教室の窓から刺さる殺気を感じながら。

e p 1 (後書き)

自分で言うのもなんですが、駄文ですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1662ba/>

魔法少女リリカルなのは Only the Spartan

2012年1月14日15時45分発行